作／寺田憲史　絵／おちよしひこ　©1991 SEGA

とつじょ、出現した青い光のカタマリ！

そのため、オムレッツの持つタマゴ型のメカ、〈エネルギー見っけたメカ〉が、はげしくふるえだしました。

それは、超光速エネルギー、〈ソニック・パワー〉が大接近したっていう知らせです。

バコ〜ン！

タマゴ型メカは、とうとう大きな音を立てて二つに割れました。そして、ナント！ その中から小さいドクター・エッグマン（これもメカ！）が飛び出すと、こう叫んだのでした。

「見っけたぁぞ〜い！ ソニック！」

「ソニックだと？」

おどろいたのは、青い光のカタマリにキックされたアントン、そしてベルーカ兄弟です。

いやそれは、タニアやリトル・ジョンも同じこと。しかも、青い光がおさまると、さらに、

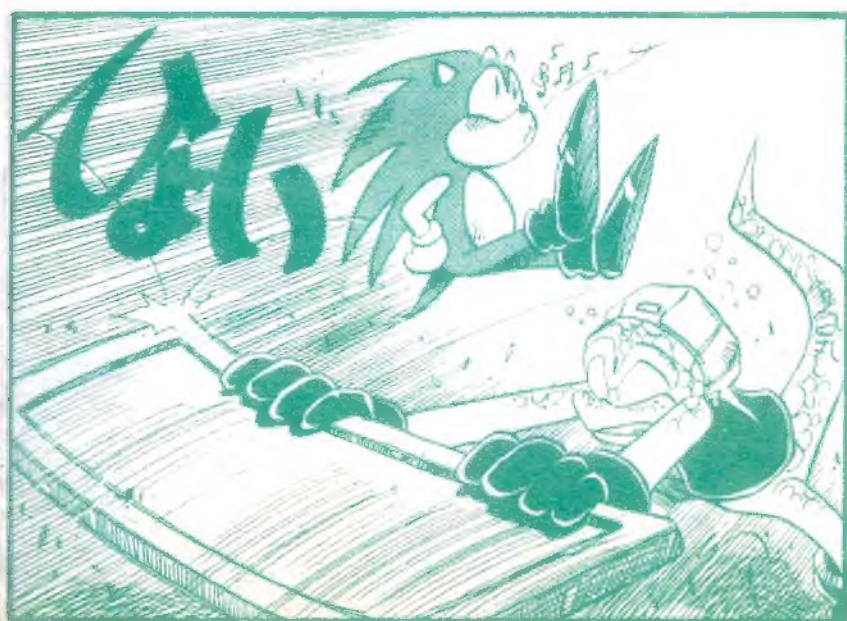
「ええ〜！ ウソ〜？」

ポン

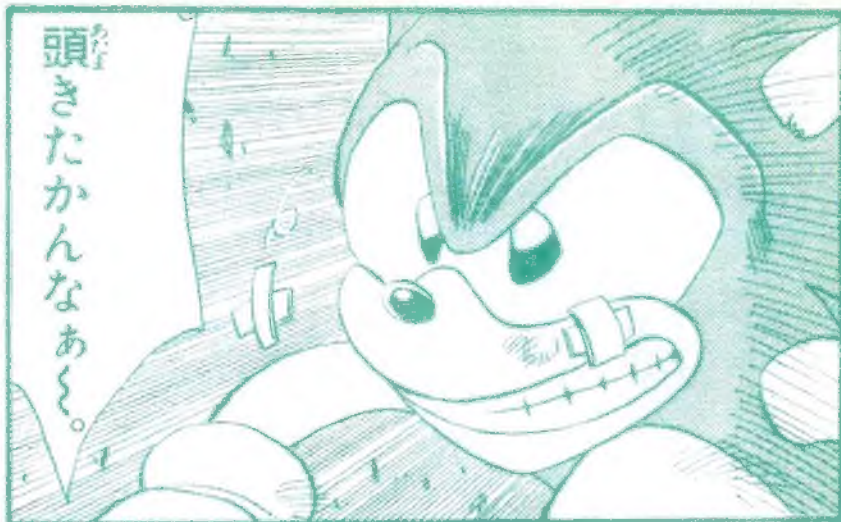
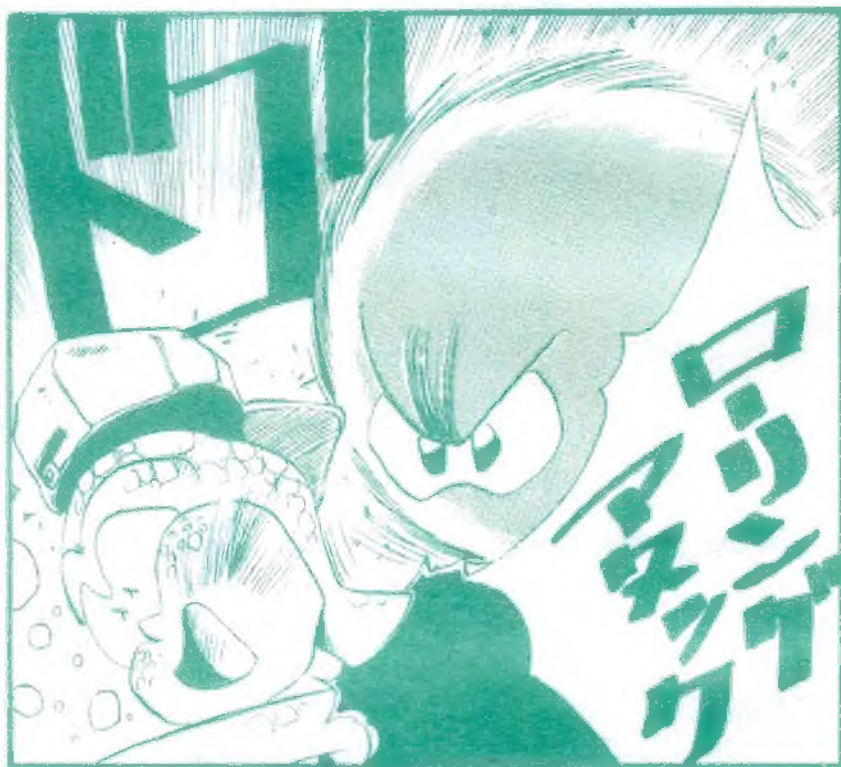
これまでのお話▼ 学校からの帰り道、乱暴者のアントン・ベルーカにつかまったニッキは、メガネをはずされ、池に落とされてしまいます。水の中で意識がうすれてゆくニッキ。ところがその時、青く光りかがやくカタマリが池から飛び出して、いきなりアントンにキックをおみまいしたのです……

って感じに、大声を出してしまったほどでした。それもそのはず、青い光と思えたのは、実は青いハリネズミの少年だったのです。
　タニアはいっしゅん、
『あれえ？　お兄ちゃん？』
と、思いましたが、すぐに「やだ、ちがうよねえ」とブルブル頭を振りました。
　第一、ニッキより背が高いし、年もいくつか上です。それに、メガネもかけていないし。それにそれに、なにより、いつもおとなしいニッキに比べて、ちょっとツッパッタ感じのヒトだったのです。
「へっ、いかにもオレが、ソニック・ザ・ヘッジホッグだ！」
　ハリネズミの少年は、そう言って、ツンツンと上を向いてる前髪をガサガサ～ッとかきむしりました。どうやら、これがカッコをつける時のクセのようです。
「このヤロ～……、このアントン様にはむかってタダですむと思うなよ～！」
　アントンは、道路のわきに立てられていたピザ・ショップの看板をひっこ抜くと、
「でやぁぁぁ～～～～！」
　ソニックになぐりかかっていきました。
「イエ～イ！　いいぞ、アントン兄ちゃぁ～ん！」
　四つ子たちが、声援を送ります。
でも。――ところが！
　ソニックのスバヤイことスバヤイこと。アントンの振り上げる看板を、宙でヒョイヒョイとかわし、ついには、
「そ～れ！」

看板に描かれたピザの上で、マイケル・ジャクソンのムーンウォークみたいなかっこうをしてみせたのでした。
「ケケケッ！　どんなもんだい。」
　ソニックは、すっかりヨユウ、って感じでタニアたちに手を振りました。でも、アントンはそのスキを見逃しません。
「そ～りゃあ、アントン・ストレート・パンチ～！」
　ドガァ～！　次のしゅんかん、アントンの

頭きたかんなぁ～。

強れつなパンチがさくれつ。調子にノッテいたソニックは、そのパンチをモロに受けて、ビュ～ン！と飛ばされてしまったのでした。

「ドクター、……伝説のスーパースターのわりには、けっこうドジだなや。」

「う～む……。見れば、まだ子どもだ。このワシが、ヤツの未熟な能力をもっと開発してやれば、あんなドジもやらんようになるじゃろ～て。」

「イデデデ・・・。」

ソニックは、ようやく立ち上がると、

「オ～シ、もうカンペキ頭きたかんなぁ～。」

そう言って、ダッシュ！　ブンブンと看板を振り回すアントンに突進していきました。

ソニックの体が、いっしゅん青い光のカタマリのようになります。そして、

「ローリング・アタ～ック！」

ものすごいスピードで回転すると、アントンにぶち当たっていきました。はじめに、アントンの突き出たアゴ。そして、おなか。さらにお尻、背中と、もうメチャクチャです。

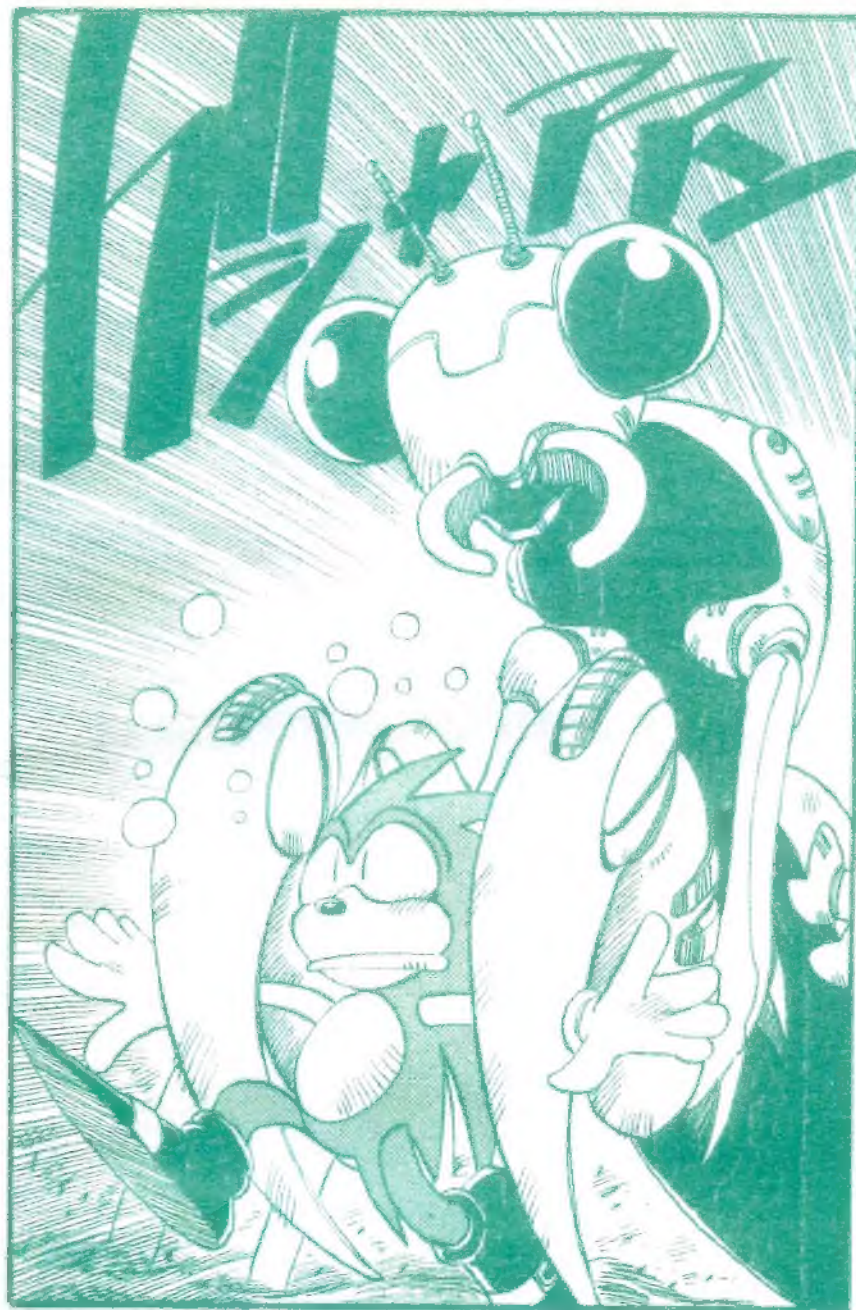
その目にも止まらないスピードに、エッグマンは、大コーフン。

「こ、これよ！　このパワーこそ、この世界最強の科学者、ドクター・エッグマンがさがし求めていた秘密のエネルギー！」

プルプルプル～、っと体をふるわせ、それと同時に「うひょひょひょ～！」おかしな笑い声をあげました。

「ドクター、落ち着いてくれだりあ～。」

さて、お兄ちゃんのアントンがやられたとあっては、四つ子もだまってはいられません。

「よ～し、アントン兄ちゃん！　待ってろ、

今ソニックのヤツをやっつけてやる！」

マッド、トッド、ハッド、ミグ〜は、それぞれ棒っきれを拾うと、アントンの周りをくるくると動き回るソニックに、それを振り下ろしていきました。

でも、そのたんびに、

「げぇ！　ぐぉ！　……うぎゃ！」

なぜかたたかれて悲鳴を上げるのは、アントン兄ちゃんです。超光速のソニックが、そうカンタンにたたかれるワケありません。

「ぎぇ〜！　おまえら、オレを殺すつもりかぁ〜！」

「ひぇ〜、兄ちゃん、ゴメンよ〜！」

そして、ソニックが、さらに強れつなローリング・アタックをおみまいすると、ベルーカ兄弟は、悲鳴をあげて逃げていきました。

メカ怪獣・カマキランのワナ！

「やったぁ〜！　ありがとう、ソニック・ザ・ヘッジホッグ！」

タニアとリトル・ジョンは、大喜びでソニックのところにかけよりました。

「へっ。どうってことね〜さ！」

「すっごく強いのね。もう〜、尊敬しちゃう！

あ〜あ、わたしのお兄ちゃんがこんなふうに

強かったらなぁ。」

「あ、そうだ。ニッキは？　ソニック、ニッキを見なかった？」

リトル・ジョンが、思い出したように言いました。

「ニッキだってぇ？」

聞かれたソニックも、キョトンとなっていました。

「そうそう、たしか池の中に落ちちゃったはずだけど。」

三人は、池を見わたして、ニッキの名前を呼びました。

でも、その時！　ソニックの背後に、す～っと忍びよる機械の手があったのです。そしてその手は、ガッシャ～ン！　恐ろしい音をたてて、ソニックをつかまえてしまったのでした。

「うわ～！　な、なにをする！」

「ソ、ソニック～！」

ソニックは、巨大なカマキリのようなメカ怪獣につかまっていました。

「こ、これは？」

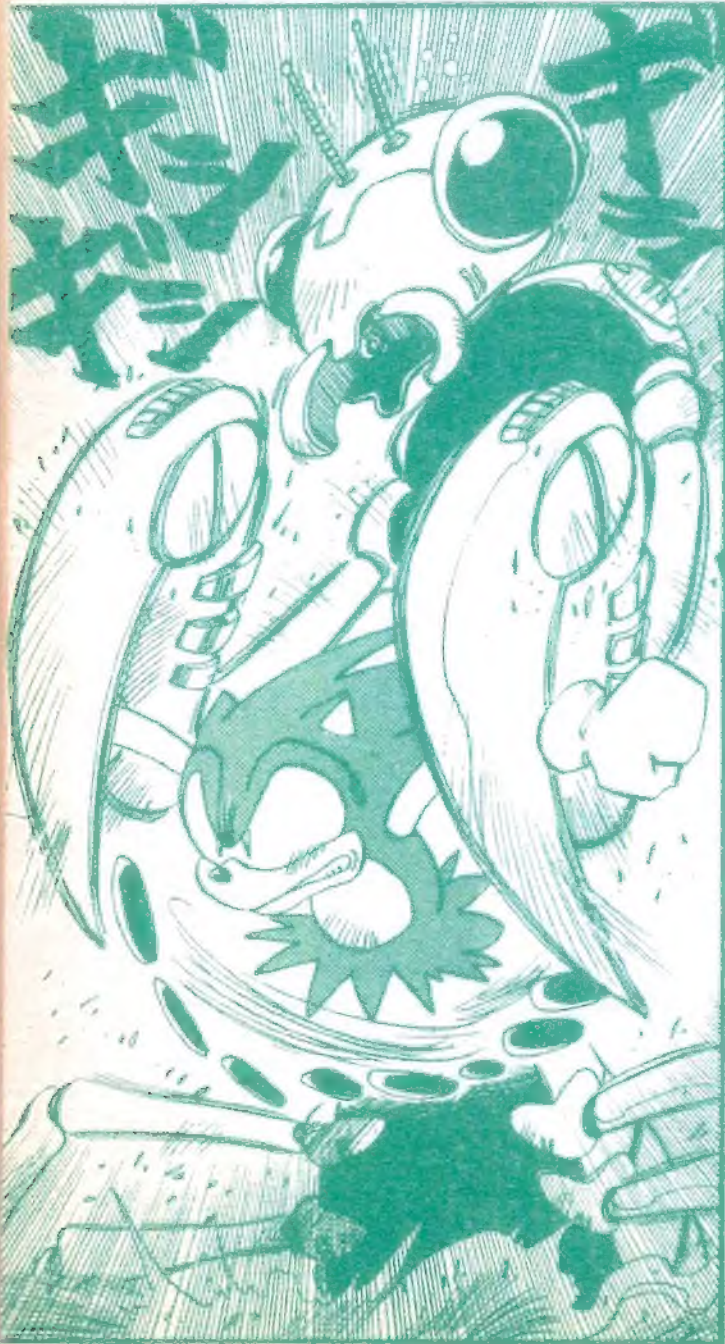
「カマキラン・エッグじゃ。」

「なんだと？」

実は、そのカマキリ・ロボットには、エッグマンとオムレッツが乗っていました。

二人は、ソニックがアントンをやっつけるのを見とどけるとすぐに、乗っていたワゴン車の形を変えて、この恐ろしいメカに変身させていたのです。

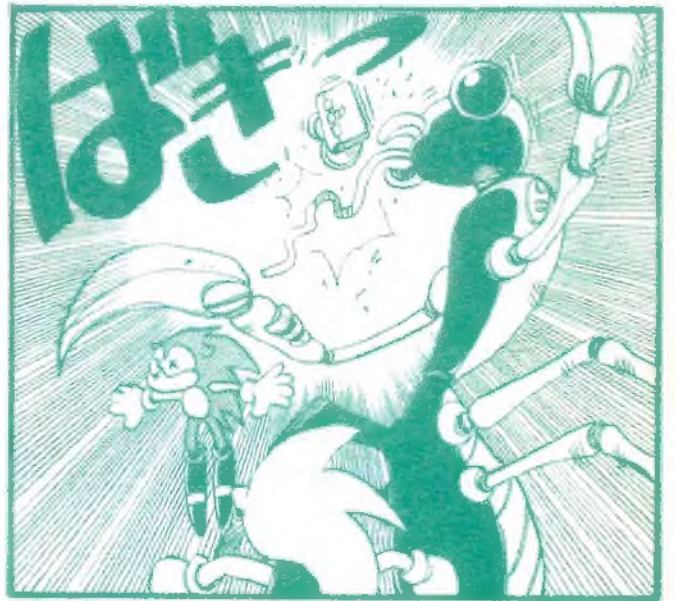
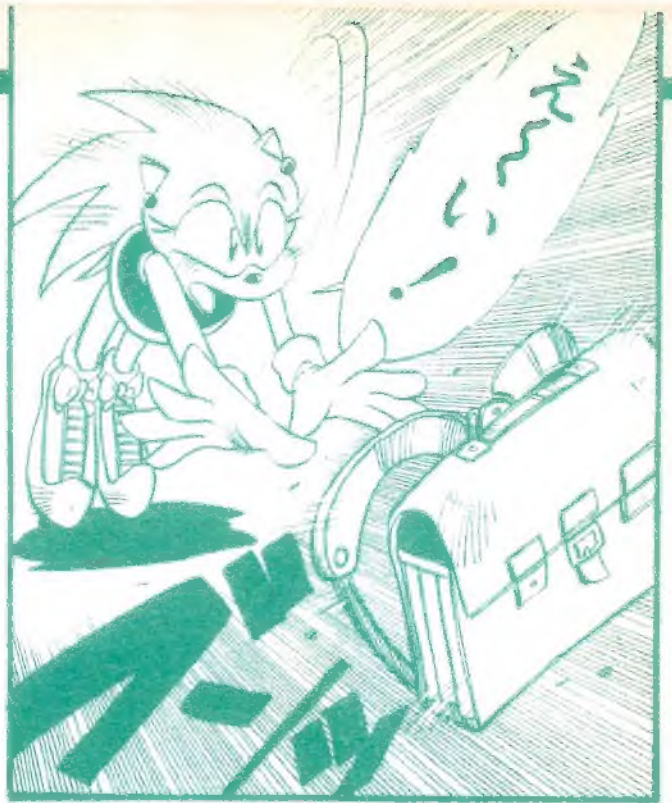
もちろん、ソニックやタニアたちからはエッグマンの姿は見えません。エッグマンは、マイクを通して、ソニックにこう言いました。

「やっと見つけたぞ、ソニック・ザ・ヘッジホッグ！　おとなしくしていれば、手あらなマネはせん。」

「へっ！　とつぜん、オイラをつかまえといて、なぁ～にが手あらなマネはせんだ。このヤロ～！」

ソニックは、全身に力をこめて、カマキランから脱出しようとしました。ソニックをつかまえたメカの手っていうのは、カマキランのするどいカマのような手で、ガッチリとカレの両腕をとらえています。

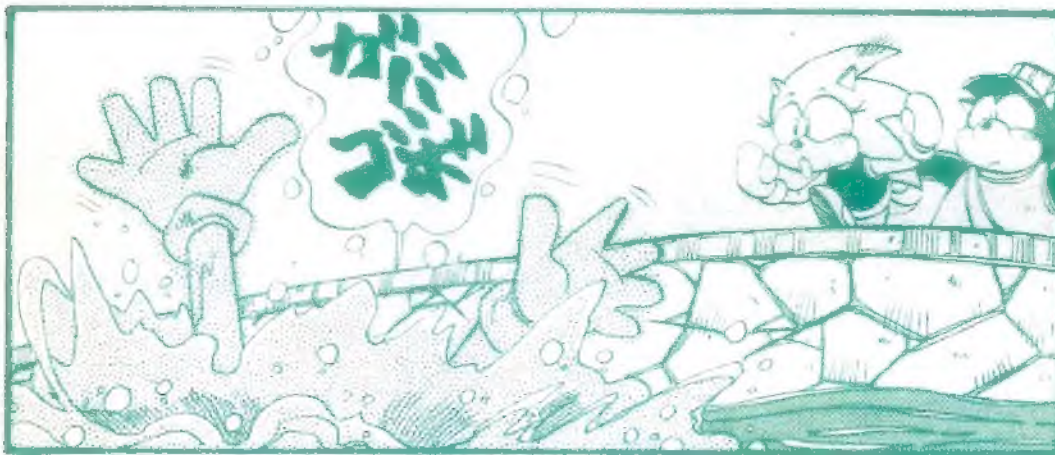
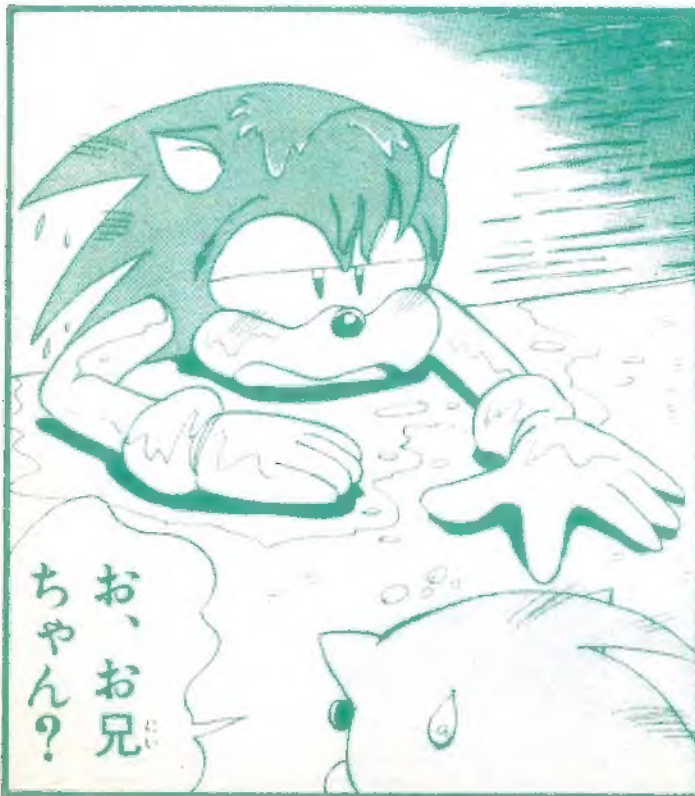
「それ～！　ロ～リング・フィ～ト～！」

ソニックは、ローリング・アタックをする時みたいに、足をくるくると回転させはじめました。

さすがにすごい勢いです。カマキランの両手は、その勢いにギシギシと音をたてはじめ

ました。
「スッゴイわ、ソニック! もう少しで、カマキリの腕がもげちゃいそう」
「う〜む、……オムレッツ! やむをえん、エネルギー吸引そうちを作動させるのじゃ!」
「アイアイサ〜だなや!」
ガッコン! オムレッツが、そうじゅう席のボタンを押していきます。
すると、ピコ〜ンピコ〜ンピコ〜ン!
さまざまなランプが点めつをはじめました。
そして、カマキランの無気味な口から、ビュ〜! ちょうどストローのようなモノが飛び出し、ソニックの首につきささったのでした。
「うわっ!」

そのとたん、ソニックの全身に強れつな痛みが走りぬけました。しかも、みるみるうちに、体から力が吸いとられていくようです。
「ううう……、へ、ヘンだぞ。急に力が、……ぬけていく……。」
「ぬふふ・・・、どうだソニック。これで、わが研究室につれ帰れるってもんだわい。」
「どうしたの、ソニック!」
「タニア! ほら、カマキリの口からストローが出てるよ。ソニックってジュースだったのかなぁ?」
リトル・ジョンが、ノンキなことを言っています。でも、そのことばで、タニアはいいことを思いつきました。

「あのストローで、ソニックのパワーを吸いとっているのね。よ〜し!」
タニアは、バスケットが得意。それで、肩に背負っていたカバンをボールのようにかまえると、
「え〜い!」
ジャンプして、カバンをバスケのようりょうでストローめがけて放り投げました。
グシャッ!
カバンは、みごとストローに命中。おかげで、ストローはフニャア〜って感じに折れてしまいました。
ソニックが、みるみるうちに元気を取りもどしていきます。
「ぎゃあ〜、ドクター、ヤバイだなやぁ?」
オムレッツが悲鳴をあげました。でも、もうおそいのです。
「くぉのヤロ〜! オラもう〜あったまきた

かんなぁ〜！」
ソニックは、いきなりパワー全開。もうその後の活躍の、すさまじいことったらありません。
必殺ローリング・アタックにつぐローリング・アタックで、カマキランをメッチャクチャにぶったたいていったのでした。
そして、とうとうドガァ〜ン！カマキランは、大爆発。「ひえ〜！」黒コゲになったエッグマンとオムレッツは、あわてふためいて逃げ出していきました。
「ソニック〜〜〜！」
タニアとリトル・ジョンは、爆風で池の中にふっ飛んだソニックのほうに走っていきました。
ぶわ〜！
水の中で、ソニックがもがいています。
「さぁ、ソニック！つかまって！」

タニアは、水の中に乗り出すようにして、ソニックを引き上げました。
でも！――引き上げて、ビックリ。
引き上げました。ソニックではなく、
「あ、あれぇ〜？お、お兄ちゃん？」

そう。さっき、池に落ちたニッキだったのです。
さてさて、ソニックはいったいどこへ行ってしまったのでしょう？
7月号につづく